

令和3年度 奈良市立二名幼稚園 研究実践概要

園長名 野口 和代
全園児数 19 名

1. 研究主題 「たくましく生き生きと活動する幼児を目指して」
― 子どもの意欲を育むために ―
2. 研究年度 初年度

3. 研究主題設定理由

核家族化や少子化が進む中、子どもたちは身近な限られた環境の中で生活し、生活体験や人との関わりが希薄になってきている。園では友達と触れ合い、様々な活動に取り組む中で心を動かして「面白い」「もっとやってみよう」と意欲をもち、主体的にたくましく生き生きと活動する幼児を育てたいと主題を設定した。

4. 具体的な研究内容

①研究のねらい

- ・様々な環境に自ら関わり、充実感や満足感を味わい、意欲的に活動する幼児の育成を目指す。

②研究の重点

- ・研究主題について、職員相互の共通理解を図る。
- ・一人一人の実態や発達過程を捉え、学年の特性に応じた指導計画や教育環境の見直しをしながら、子どもの意欲を育むための環境構成の工夫と保育者の援助の在り方を探る。
- ・保護者や地域の方との連携を深めるとともに、地域の教育力を活かしながら幼児が自ら活動したいと思えるような日々の保育内容を研究し工夫に努める。

③活動の方法

環境構成と保育者の援助.....	生き生きと活動する姿.....
------------------	-----------------

【事例1】4歳児「土が蓋になった」

- 水や砂、泥の関係や不思議さ、面白さに気付く。
- 保育者や友達と遊ぶ楽しさや喜びを味わう。

砂場でペットボトルに水を汲んで遊んでいたA児。水が入ったペットボトルを逆さにし、砂場に差し込んだ。そのペットボトルを持ち上げ「見て先生！キャップしてへんのに水が出ないで！」と興奮気味に話す。「ほんとだ、すごい」と一緒に驚き、ペットボトルの口を覗き込むと土が詰まって水が出ない様子であった。



「不思議だね。なんでかな」とA児や周りにいた子どもに問いかけた。「うーん、分からねん」と話すが、B児はA児が持つペットボトルの口をのぞき込み「土が入ってる。分かった、土が蓋になったんや」という言葉に、保育者がペットボトルの口を見せると「ほんまや、土がある」「土が蓋になって水止まってるねん」と子どもたち。それを見て周りにいた子ども「やってみよう」とペットボトルに水を入れて砂場に差し込み始めた。何度も試すうちに軽く差し込むだけでは砂が少なく蓋にならないこと、「ぐりぐり」と押し込むことで蓋がしやすいことを発見する姿があった。



<反省・評価>

A児が面白い発見をしていることに気付き、A児の発見に保育者が驚いたり、タイミングよく他児を巻き込むような言葉がけをしたりしたことで周りにいた子ども「やってみよう」と何度も試すなど意欲的に遊ぶ姿につながった。

【事例2】4歳児「Aくんが頑張ってたから」

- いろいろな遊びや活動に自ら関わり、意欲的に取り組む。
- 友達の様子を見て、自分も運動遊びに挑戦する。

A児は1度逆上がりができることをきっかけに、また回りたいと自ら何度も取り組んでいた。やっと成功した時には、「何度も挑戦したからできたね」とA児の根気強さを言葉にして伝え、大いに認めるようにした。A児の様子を見ていたB児が、「僕、跳び箱してみたい」と保育者に話した。B児は5歳児が跳び箱をする姿を見て、もう少しで跳べそうだったので「惜しい！もっと思い切り走ってみよう」「足はしっかり広げよう」と具体的にアドバイスを伝えた。すると「よし、もう一回！」と息を切らしながら挑戦し、初めて成功した。B児は満面の笑みで飛び跳ねながら喜んだ。今まで自分からあまり挑戦することがなかったB児に「なんで挑戦しようと思ったの？」と保育者が聞くと、B児は「A君が頑張ってたから」と話した。



<反省・評価>

A児とB児は、できないことや初めてのことに對して消極的であった。保育者は自分から挑戦して成功できたことを自信にし、丁寧な言葉がけや見守りをしてさりげなく援助した。B児がA児の姿をみて「A君が頑張ってたから」と友達に刺激を受けて取り組んだことが、成功体験に繋がり、その後も様々な活動に対して「頑張ったらできるからな」と話し意欲的に取組もうとする姿になっている。

【事例3】5歳児「色が変わった！」

- 自分なりの予測をもち、試したり工夫したりしながら遊ぶ。

色水遊びでつくったジュースを自動販売機やお店で売ることを楽しんでいた。色水に使う草花を食べ物に見立て弁当を作ったことでお店屋さんのイメージが広がり、もっと他の食べ物も売りたいとの意見が出た。遊びの話し合いで昨年遊んだ泡遊びを思い出し、ケーキも一緒に売ることになった。「手が痛くなるまで泡立てる」「ボウルをひっくり返しても落ちないくらい」「角が立つくらいやで」と友達同士話をしている。出来上がったホイップは草花を飾りつけケーキやシェイクなどを作って遊ぶ。遊ぶうちに「いろいろな味があったらいいな」「色をつけたい」とイメージが膨らんだ。「何で色つけたらいいかな」と話す幼児たちに保育者は「どんな物が使えると思う?」と問いかけた。「うーん、絵の具とか?」「お花入れる?」考え込む子どもたちにA児が「あ!ジュース入れてみたらどう?」と提案した。「いいかも!」「きれいに出来そう!」と、早速花を摘んできて色水を作り始めた。石鹸の粉に色水を入れ泡立てると、優しい淡い色合いのホイップができた。「美味しそう」「今度は〇〇と〇〇を混ぜてみよう」と思い思いにホイップづくりをすることを楽しんでいた。するとB児がホイップに、「青いジュース入れたら緑色になった!」と伝えに来た。それを聞いた周りの子どもが集まり「どうなったん?」「見せて」とたずねた。B児がもう一度石鹸に色水を入れると、たちまち青色から濃い緑色へと変化した。「ほんとや」「どうなってらん」「何でやろう」と子どもたち。保育者は「すごい発見やね。不思議だね」とB児の発見と驚きに共感し「他にも変わる色があるのかな?」と問いかけた。すると子どもたちは「他にもあると思う!」と様々な色を試し始めた。



<反省・評価>

今までの経験が繋がり、遊びを更に楽しくしようと自分たちで遊びを進めようとする姿が見られるようになってきた。保育者が遊びの展開を見守り、タイミングよく声を掛けたり、共感したり、また、自ら選べるように様々な用具を準備しておいたことが、子どもたち自らがアイデアを出しながらいろいろな方法を試したり、工夫したりして意欲的に遊ぶ姿へと繋がった。

【事例4】5歳児「僕たちも滑りたい」

○友達と同じ思いをもち、協力して遊ぶことを楽しむ。

雨どいを繋げての転がし遊び。より高く、長いコースにしようとして滑り台を使って組み立てている。出来上がったコースに水と一緒にビー玉や葉っぱなどを流すうちに「流しそうなめんがしたい」と部屋から糸や紐を持ってきて遊んでいた。ある日、A児が「気持ちよさそう。自分も流れてみたい」と呟いた。「いいな!でも僕たち大きいし」「スモールライトがあればいいのに」「プールでスライダーやったことある」と盛り上がった。その日の話し合いで取り上げ、「築山から水を流して滑ったらどう?」「うさぎ組さんの時に滑って遊んだもんな」「ブルーシート敷いてやる?」「でも滑り台も使えると思うで」「滑り台やったら濡れても大丈夫やしな!」と、たくさんのアイデアが出て、水着に着替え滑り台を使って遊ぶことに決まった。



次の日さっそく水着に着替えて園庭に飛び出していった子どもたち。いつものように雨どいでコースを作り、滑り台の下にビニールプールを設置した。バケツやホースで滑り台の上から水を流し、ビニールプール目掛けて思いっきり滑り降りると水しぶきが大きく上がった。「きゃあ!」「気持ちいい!」「楽しい!」子どもたちの満面の笑みがこぼれ、全身を使ってダイナミックに水遊びを楽しむ姿が見られた。



<反省・評価>

ビー玉のように自分も水を滑ってみたいという子どもの思いを保育者が取り上げ、クラス全体に広め話し合ったことで子どもたちの中から様々なアイデアが上がり、A児のアイデアに共感し、より遊びを楽しくしようと子ども一人一人が積極的に意見を出し合う姿が見られた。子どものアイデアが実現できるよう環境や用具を整えたことで、自分たちの思いが実現し達成感や嬉しさ、自分たちで遊びを進める充実感を存分に味わうことができた。このような経験の積み重ねが幼児の主体性や意欲につながっていくと考える。

5. 研究の成果

- 遊びの中で子ども達が、自ら考え工夫できるような十分な環境構成に努めたことやタイミングの良い援助などが、自分たちで考えて話し合い、遊びをもっと楽しいものにしたという意欲に繋がった。また、楽しい経験を積み重ねることにより、主体的に関わる力が育った。
- 保育者は子ども達の意欲を育むために、日頃から、遊びのどこに興味や関心があるのかを見極める力が必要であると再確認した。

6. 今後の課題

- 子どもが多様な環境と出会いかかわる中で、感動体験を積み重ねていけるよう保育内容の充実を図るとともに、豊かな体験を通し、幼・小・家庭・地域との連携を密にし、たくましく生き生きと活動する幼児の育成をめざしたい。